

(別紙様式3)

平成31年 3月31日

## 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都小平市たかの台2番1号  
管理機関名 学校法人 創価学園  
代表者名 理事長 原田 光治 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

平成30年 4月2日(契約締結日)～平成31年 3月31日

#### 2 指定校名

学校名 関西創価高等学校  
学校長名 杉本 規彦

#### 3 研究開発名

TRY 人(じん)の郷・交野から  
平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム

#### 4 研究開発概要

関西創価高校がSGHを通して生徒に身につけさせたい力は、国連の提起する地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」である。Active Learning の土台の上に、全校生徒を対象とした「環境・開発・人権・平和」の4分野について学ぶ探究型総合学習 GRIT (Global Research and Inquiry Time)や Global Citizenship Seminar、希望者を対象とした知的好奇心を高揚させる高大連携プログラムの UP(University Partnership)Class、希望者から選抜された生徒がオールイングリッシュで徹底した探究を行う LC (Learning Cluster) で、確かな知識と広い教養の涵養を目指す「世界市民教育」の教育課程を高大連携して研究開発する。

#### 5 管理機関の取組・支援実績

##### (1) 実施日程



った。2年生では、プレゼンテーションに必要な「いかに伝えるのか どのように伝えるのか」という知識と技術を習得するための講義を実施。3年生では「模擬国連」の内容を深めるためのリサーチの時間を GRIT の時間だけでなく、「政治・経済」の授業の中で、各自の担当国のリサーチする時間を確保し、政治や経済についてのプレゼン発表を行った。「数学」の授業では、データ分析やエビデンスを示すのに必要な数値を読み取る、統計学を用いた分析の力の育成を行った。「現代文」の授業においては、本校 SGH の根幹となる、創立者の平和提言を用いて、論説文の読解力と、表現力を育成する授業を行った。論文作成を踏まえ、アカデミックライティング講座の前には「現代文」の授業でも論文作成の授業を行った。昨年に引き続き、GRIT を深めるための教科横断の授業が大きく進んだ。学習評価においても、「政治・経済」の授業の中で、GRIT で各国大使としての視線で作成した論文を、ルーブリックを用いて生徒と教師で評価し、成績に反映した。そして作成した論文を基に、「英語」の授業では英語サマリーの作成を行い、その内容を成績として評価した。このように各教科の中で GRIT の取り組みを評価できたことで、GRIT に取り組む生徒の意識がさらに向上した。

○Global Citizenship Seminar として外部講師を招いての講演を 3 回行った。

○GRIT Field Work として 7 月に東京 10 名、8 月に広島 14 名、3 月に東北 12 名での Field Work を一般公募し実施した。特に「平和」をテーマに核廃絶について探究活動を行った広島 FW では、本校が所在する交野市の交野高校生徒会と協力して、市内各所で「核兵器禁止条約締結」に向けての署名活動を実施することができた。昨年黒田市長と語り合った「今後、交野市で行っている平和教育や核廃絶の取り組みについて、市内の中高が交流して平和学習、核廃絶署名などを推進していく」ことについては、本校の GRIT で行った「平和」「人権」のプログラムと実施方法を交野市内の中学校に共有することで実現できた。

○SOKA Progress Class については、University Partnership (通称 UP)Class を開設し、大学などから講師を招き地球的課題の基礎講座を開催した。Advanced English & Math Class は継続して実施。どの講座も生徒から高い評価を得た。

○Learning Cluster については、高校 2,3 年生より 22 名を選抜し、Field Work in Tokyo、Field Work in America を実施。年間を通して英語での探究が進み、高校生による平和への提言「Peace Proposal」を完成させた。生徒たちは「環境・開発・人権・平和」の四分野を SDGs に照らして徹底的に学んだ後、「世界人権宣言 70 周年」ということを踏まえ、「人権」に焦点を当て、「児童虐待」「LGBT」「女性のエンパワーメント」「難民」「核廃絶」の 5 つのトピックから研究を続けた。

○Active Learning については、校内で研究授業ウィークを 2 回開催し、お互いの授業内容の研鑽に努めた。現在、ほぼすべての授業で、座学のみでなく主体的で対話的な深い学びを意識した授業が展開されている。各教科においても、GRIT の内容を教科横断でさらに深めるための研究が進み、取り組みが大きく向上した。

○Newspaper in Education については、年間通して各クラスで取り組み、コンクールでも多くの入賞者が出た。

○Feel Japan Program については、ほぼ例年通りの計画で進んだ。

○その他の取り組みとしては、本校で進める GRIT の四分野の一つである「人権」について、多くの卒業生の弁護士を招き、現実社会を踏まえての「人権研修」を行った。

また、本校のSGH運営指導委員でもある、梶田叡一氏を招き、講演会「真の国際性を育てるために」を全教職員で受講。「活力・積極性」「対話力」「語学力」「イノチとしての平等感」という4つのキーワードから理解を深めた。

○SGH後のカリキュラムについては、新教育課程を見据えて、「新カリキュラム検討委員会」を発足させ、集中討議の職員会議を何度も開催し、全教員で「育てたい力」についての議論を重ねた。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

○SGH4年目、SGHAを入れると5年目となり、ほとんどの教員が3年間のGRITのカリキュラムの流れを認識・理解・経験することで、さらに精査が進んだ。流れとしては1年次は「グローバルイシューとの出会い」をテーマに、「環境」「開発」「人権」「平和」に関する知識のインプットとディスカッションを中心としたプログラムを、SDGsに照らして様々に行った。全生徒がタブレットを持ったことで、本校がNASAと共同で行う「アースカムプロジェクト」に全員が参加可能となり、タブレットから国際宇宙ステーションを遠隔操作して、宇宙から地球を撮影し調査する英語でのプログラムを全生徒が体験。宇宙から俯瞰的に地球を見つめる目線を持たせるとともに、自分たちの撮影した写真が「世界の学者の研究材料」となり、研究者としての実体験を積めた。また、GRITの大きな柱であるSDGsについては、「地理」の教科の中に落とし込んだ。そのことで、SDGsの学びの深さを授業の成績として評価が可能となり、生徒たちの意識が向上した。その上で、例年秋に行っていた校外学習をSDGsフィールドワークに変更し、学びの内容別に3か所で実施。チームで別れて日本国内におけるSDGsの推進を行う行政や企業に調査に行き、その振り返りを授業で行ったり、お互いにプレゼン発表することで、身近なところにも、自分たちにできることがあることを学んだ。その結果、「国連が推進するSDGsを知っていますか？」の質問では「知っている」「少し知っている」が入学前は21.9%だったものが、91.6%にまで向上した。2年次は「グローバルイシューとの戦い」をテーマに、「環境・開発・人権・平和」の4分野からトピックをチームで選んで探究活動を行い、それぞれのチームが6月には大学教授に探究成果と提言を発表。大学院生によるブラッシュアップを受けて、全チームがパワーポイントを使ってSDGsに照らし合わせたそれぞれの研究・提言を保護者会や各所で発表。3月には自分たちの探究をポスターにまとめ、「学年ポスターセッション」を全学年64チームで開催。発表の対象として高校1年生を招待し、総勢700名を超える大規模なポスターセッションとなった。高校2年生にとっては、後輩である1年生に、1年間の学びを自分の言葉で全員が発表する機会となり、1年生にとっては、来年自分たちがあるべき学びの姿を確認することができ、質疑応答も活発に行えた。このポスターセッションは、教育関係者や一般の方々にも公開し、訪れた公立中学校の教員からは「生徒たちが生き生きと自分の言葉で発表する姿に感動した」「聞いている1年生の姿も素晴らしく、質疑応答が活発なことに驚いた。ぜひ自分たちの中学でも関西創価のシステムを取り入れたい！」との感想をいただき、関西創価のGRITプログラムを共有することが決定した。今後も共同で様々な活動を進めることが確認された。3年次は「世界を一つにする力」をテーマに、合意形成の力を培った。その集大成として、3年生350名全員が、100ヶ国を分担して取り組んだ模擬国連では「安全で安価な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセス」の議題で総会を2回開催。第1回総会では、高校2年生全員を

会場に招き、総会の模様を見学させるとともに、ロビー活動の際には2年生から3年生への質疑応答も可能とすることで、来年度に自分たちの行うプログラムのイメージを持たせることができ、来年担当する学年の教員団にも模擬国連の総会のイメージを持たせることが可能となり、3年次に行う模擬国連のプログラムへのスムーズな移行が実現している。第2回目の総会をSGH中間報告会の日に行うことで、関西創価の学びの成果を大きく教育関係者や行政にも公表している。SGH終了後も一般公開並びに他校との交流も検討しており、さらに発展させていきたい。本年度も、アメリカFWでは、代表生徒が採択された決議案を元国連事務次長のチョウドリ大使に直接提出。その模様は全校生徒にライブ中継され、チョウドリ大使からのアドバイスも全校生徒で共有された。今年はさらに、SGH委員会の集中討議の際に、1年次、2年次、3年次に行うGRITプログラムの内容や時期、反省点や引き継ぎ事項をグーグルドライブのチームドライブに各期（入学年）ごとにまとめ、全教員が昨年度のどの時期にどのようなプログラムを、どのような教材で行ったかが確認でき、反省点や改善点を共有しながらPDCAがスムーズに行える環境が整備された。高校3年生対象の、大学教員を招いての「アカデミック・ライティング講座」は継続して行ったが、その前に大学教員と国語科教員が連携を取りながら、「国語」の授業でも事前学習を行い、さらに内容の濃いものとなった。個人のGRITの学びの集大成として、全員が模擬国連の中で各国大使としての目線で、「安全で安価な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセス」について探究と提言をGRIT論文としてまとめ、その内容は「政治・経済」の授業の中で成績として評価することができた。完成したGRIT論文を基に、「英語」の授業の中で「英語サマリー」を作成させ、その内容を授業の成績として評価することで、模擬国連の総会終了後の生徒の集中力の持続に成功。ほぼ100%の生徒が論文・英語サマリー共に提出することができ、成果物の内容も大きく向上した。

○GRITを全校生徒対象に全教員で取り組んだため、生徒も教師もGRITで行われているActive Learningの様々な手法や効果を熟知している。その為、全教科に渡ってストレスなくActive Learningの様々な手法が活用され、主体的で対話的な深い学びがほぼすべての教科・授業で行われた。（95.2%の教員が実施）また、GRITで学ぶ内容やGRITを通して育てたい人間像を全教員が把握しているため、各教科の中でその力を育むための教科横断が進んでいると考えられる。

○全校生徒にタブレットが貸与されて2年目となり、ICTを活用したActive Learningや協働作業が飛躍的に進んだ。「本校がSGHとなって、生徒のICTの取り組みが進んだと思いますか」の質問に、全教員の97.6%の教員が「進んだ」と答えた。全生徒が使うICT使用に関するルール作りに関しては、教師が決めるのではなく、生徒たちが「タブレット審議会」を立ち上げ、自らガイドライン作成に立ち上がり、「やっていたこと」「いけないこと」を生徒のリーダーで協議して運営している。校内の各所で合意形成の力を発揮し、「問題解決への創造力」を発揮した。

○高3アンケートでは「海外で通用する語学力は必要であると思いますか。」の質問で、「必要」が91.2%となり、「どのような場面で、海外で通用する語学力は必要であると感じるようになりましたか」の質問に、複数回答可ではあったが、59.9%の生徒が「授業」と答え第一位となった。このことからGRITプログラムだけでなく、授業の充実が生徒の語学習意欲を大きく向上させたと考えられる。エビデンスとしては、3年生においては350名中114名の生徒が、この1年間で英検準一級以上の試験に挑戦した。3人に1人が準一

級以上のハイレベルな語学習得に挑戦したことは、気持ちの変容が行動の変容に移ったと考えられる。「他人のために献身的に働こうとする奉仕の気持ちはありますか」が91.1% 「身の回りで起こる問題に積極的に関わろうとする気持ちはありますか」が81.2%と高い数字を示した。「ディスカッション能力(討議力・対話力)は向上しましたか」の質問に75.7%の生徒が「向上した」と答え、「ディスカッション能力(討議力・対話力)が向上したことで、日常生活で解決できたことはありますか」の質問に「喧嘩腰の会話がほぼなくなった」「寮生活での揉め事も相手のことを考えて冷静に判断することで解決できた」「論理的に説明出来るようになって、相手を説得することができた」「語彙が増えたことや発想や着眼点の向上があり、友人との会話も楽しくなった」など、日常の生活の中でGRITを通じての学びの力を実感している。「世界の平和に貢献したいと思いますか」の質問には、81.6%の生徒が「貢献したい」と答え、「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」という質問には、「世界でどれほどの人が紛争や差別で苦しんでいるかを知り、何ができるかを考えるようになった」「とにかく勉強をして、力をつける。語学の勉強！政治・経済の勉強！」などの答えが見られた。「大学を選ぶときに国際化に重点を置く大学への進学を希望しますか」の質問に、73.8%の生徒が「希望する」と答え、進路にも大きな影響を与えた。世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」につながる、グローバルリーダーとしての心を育んだと考えられる。

○生徒の意識の変容は各種のコンクールや大会にも表れた。Newspaper in Education では大阪奨励賞、JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストでは特別学校賞を受賞するなど、多くの生徒が自主的に参加活躍し、多数の受賞者を輩出した。

○米国ミドルベリー大学院モントレイ校大量破壊兵器不拡散研究所での「日米露の高校生による核不拡散教育会議」(CIF)に2名が参加、高い評価を受けた。

○Learning Cluster については、Field Work in America において元国連事務次長のチョウドリ大使とのセッションや、核時代平和財団のデビッド・クリーガー博士とのセッション、南カルフォルニア大学やUCLAでの教授とのセッション、シュタイナー教育のウォルドルフ学校の生徒との交流など充実したものとなった。ウォルドルフ学校において、関西創価高校とウォルドルフ学校の生徒で、初の国際フォーラム「Discussion on Global Issues」を開催した。高校生による平和への提言「Peace Proposal」については、本年度は学びをまとめて論文として発表するのではなく、プロジェクトの作成を掲げ、高校生としてどのようなアクティビティや学びを行えば、実感としてグローバルイシューを体感できるのかを考え、生徒たちは様々なプログラムを開発した。その内容はGRITプログラムとしても採用を検討している。

○University Partnership Class を受講した生徒は、各界で活躍する11名の様々な分野の講師から、1年間にわたり講義を受け、主体的で対話的な深い学びとなった。

○「世界津波の日」高校サミット in 沖縄に3名参加。日本を含む世界49カ国、約400名の生徒とともに調査を行い、自然災害に対する知識を深め、アクションプランのプレゼンテーションを行った。

○トビタテ！留学JAPANに2名が選出され韓国のソウルとオーストラリアのパーズへ留学した。

○世界に興味を持ち、多くの生徒が海外に旅立った。世界大会ならびにSGHとしての

フィールドワークで13名、個人留学で19名、合計32名がこの1年間で海外に実際に足を運び探究活動を行った。

○GRITの取り組みについて、教員に対するアンケートで「本校のGRITプログラムは、国連が提起する地球的課題の探究に取り組む内容になっていますか」の問いは、昨年に引き続き100%の教員が「よくできている」「たいへんによくできている」と答えた。

「SGHの諸活動は、自分の授業や生徒に対する指導法・内容に影響を与えましたか」の問いには、「影響を与えた」と答える教員が、昨年の97%から、71.4%と下がった。この数字はマイナス的な要素というよりは、新たな授業の研究開発というよりもSGHに影響を受けた指導法が定着し、安定して行われていると考えられる。アンケートでは「生徒だけでなく、教員が海外で自由に研修を受けたり、ボランティアに参加できる機会がほしい」「世界市民教育のさらなる深化と洗練化を学校全体で取り組むことが必要」など、教師自身の成長やSGH後を見据えた建設的な声がたくさん聞かれた。

○運営指導委員会を3回開催し、運営指導委員からは「関西創価としての取り組みとしては大きく成功している。今後はこのプログラムをどれだけ多くの学校や教育機関に普及させ、実行していくのが今後の課題」「多くの生徒の心の変容や、行動の変容は確認できたが、100%の生徒が変わったわけではない。変わらない生徒は、なぜ変わろうとしないのかという研究が必要」とのお言葉をいただいた。

○昨年度よりユネスコスクールにも認定され、ユネスコスクールとしての取り組みも開始している。ユネスコスクールのネットワークを活かして、本校の取り組みを地域や世界へ広げていきたい。

○高校3年生の模擬国連では、大学院生TAによるアドバイスやJICA 関西によるアドバイスなど、国内にいても世界を感じる取り組みができた。

#### <添付資料>目標設定シート

### 8 次年度以降の課題及び改善点

○GRIT授業の満足度は上がっているが、全員を対象としているため、さらに満足度を上げる必要がある。運営指導委員の「多くの生徒の心の変容や、行動の変容は確認できたが、100%の生徒が変わったわけではない。変わらない生徒は、なぜ変わろうとしないのかという研究が必要」との言葉を受けて、「グローバルイシュー(世界で起こっている様々な問題)に対する関心がある」と答えた生徒の中で、関心はあるが、「グローバルイシューに自分が関わりたくないと思った理由」について聞いてみると、第一位が「自分が生きることで精一杯だから」で20%、第二位が「世界平和なんて大きすぎるから」で18%、「自分には苦しむ人を救えないから」16%となった。意外なことに「自分には関係ないから」は4%、「自分や家族に危険が及ぶから」は2%となり、行動に対してネガティブであっても、自分勝手や自己中心的な考えがそうさせているのではなく、ネガティブな生徒の中に、日常で精一杯になっている様子や、自分の力を信じきれない自己肯定感の不足が見受けられた。あくまでも100%の生徒がGRITを学ぶことに意義を感じ、積極的に取り組めるよう、内容の精査と時間配分の工夫をさらに行う。生徒の変容にこだわり、変容の要因となる心の変化にまでこだわるプログラムとしたい。

○SGHプログラムを柱として、生徒が持った興味・関心をさらに深めるために、先生

方の協力で、各教科においての GRIT 内容を補足はもちろん、持たせたい力の育成に向けた研究開発が進んだ。学びを深めるための内容や時期を精査し GRIT の教科横断がカリキュラムとして大きく進んだ。

○SGH 後を見据えて、SGH で完成させた GRIT プログラムの科目化と、生徒たち自身が時にはクリティカルに考え、時にはロジカルに考えてまとめ、発表できるプログラムとして、「TOK」（知の理論）などの科目化、言語技術的要素の習得と学術的文章を書く力を育成する「アカデミック・ライティング」の科目化など、GRIT を通して「育てたい人物像」である「世界の平和に貢献する、使命感・共感力・問題解決の創造力を持った人物」の育成カリキュラムの完成に着手したい。

○本校生徒はクラブ活動の参加率が 90%であり、学校の諸行事などの活動も盛んなため、活動時間の制約があるのも課題である。生徒の負担を少なく、なおかつ多くの生徒が積極的に活動できる抜本的な時間割、授業科目のカリキュラム設定に全教員で取り組む。

○学びの部分での探究や知識は深まったが、実際に地域に参加して取り組むプログラムや、社会で体験するプログラムが弱いとの指摘があった。今年は「核兵器禁止条約の締結」を目指す署名活動の取り組みを、地元の交野高校生徒会を行うことができた。また、本校の GRIT プログラムを交野市内の中学校にも共有し、共同で活動することも計画を始めている。交野市長や教育委員会も巻き込んだ、生徒の交流を進め、ユネスコスクールとしてのネットワークも活用し、地域から世界へ発信するプログラムを開発する。

【担当者】

担当課	経理募金課	TEL	072-891-0011(代)
氏名	坂井俊仁	FAX	072-891-0015
職名	主任	e-mail	sakai@soka.ed.jp